
とある一つの話

華弧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある一つの話

【著者名】

Z9732C

【あらすじ】

公園に私はいた。そこにある時女の子が夜に来た。

華弧

前書き

退屈するかもしませんが・・・まあ、見てやってください。。

もうすぐで6時になる。

公園にわたり今まで遊んでいた子ども達の姿はもうない。

聞こえるのは、自分が今ここにいる「ブラン」の「キー、キー」という音。風によつて木の葉がこすれ合う音。道路を通る自動車の音。どこかの家からか聞こえる口説や笑い声。中には泣き声も混じっているかもしれない・・・。

静かではないが寂しげな感じがする。

しかし、これは今日だけではない。

これからもずっとこうだらうな。

もうすぐ6：30だ。

時間は経つてもわたりとほとんど同じ状況。自分は「ブラン」をここでいた。

ツザ ツザ

砂と靴が擦れ合つ音がした。

(こんな時間に来客か・・・いや、ここは家じやないからその言い方は違うかな。珍し・・くはないか。確か昨日、高校生がサッカー

の練習をしにこの公園に来てたし。）

その音がした方を見るとそこには高校生の男の子ではなく・・女の子・・・だった。

（女の子・・・つていう歳ではない・・・な）

彼女は高校生だった。しかし、ここから近辺の高校の制服ではなかつた。

今は10月。もう肌寒い季節になり、最近ではコートを着てる人を見ることが多いくなってきている。

彼女はコートは着ていなかつたが、黒っぽい靴下を穿いて紫っぽい色と黒のチヨックのスカートはひざぐらいまで。紺のブレザーの下にはグレーのセーターを着ていた。そして紺のネクタイ。髪はかたより少し下ぐらいまでで銀縁の眼鏡をしていた。容姿は普通だ。体系も細くもなく太くもなく。

「あ・・・」

彼女は私に気付き少し驚きの声をあげた。多分、誰もいないだらうと思つて公園に足を踏み入れたのだろう。しかしそこには先客がいた。

10月にもなれば暗くなるのはあつといつ間だ。もう辺りは真つ暗だつた。

しかし公園には電灯があつた。見るとそこには虫が集まつていた。

「・・・

彼女は少し迷つて、そして私の横のブランコにのつた。私は気にせず、ただブランコをゆっくりとこいでいた。彼女はそんな空間が嫌だつたんだろう。いすらかつたんだろう。5分も経たずにここを後にして。

その後何日かそういう日々が続いた。

彼女は最初の時より段々長く、私の横のブランコにのつてじょうになつた。

そして時々私の方に何度も視線を送るようになつていた。

私はたいして気にすることもなく、ただブランコをゆっくりじょう続けていた。

そして約6日たつたある日

ツザ ツザ

(また・・か・・・・。)

私は彼女と目を合わせないよう、ブランコを一生懸命、しかしうつくりこいでいた。

彼女は昨日とおなじみで、相変わらず私の横の「ブランコ」にすわっていた。

ただ違うのは、今日は私服だったこと。少女はジーパンに黒のフード付きロングカーティガン、その下にセーターを着ていた。

キー キー

少女が来てから少し経った。

「あの・・」

それが初めて彼女自身の意思で私にかけられた言葉だった。

私は「ブラン」の動きを止め、彼女を見た。

「何?」

彼女は少しピクッと顔を俯けて、そして私をもう一度見た。

「よくここにいらっしゃいますよね。」

「まあね。」

「いいい、好きなんですか?」

「ん~好き・・ではないと思つ。」

「じゃあ何で?」

「なんとなく・・・かな。」

「やうですか。」

短い話だった。しかしそれが嬉しかったのか・・・彼女はいつもより大きくプラン口をこいでここを出た。

その日からだつた。

彼女は私に何度も質問をしてくるよひになつた。

「こつから」に来てるんですか?」

「最近。」

「何時くらいに帰るんですか?」

「気分で変わる。」

「寒くないですか?」

「気にはならない。」

「何をいつもしてゐんですか?」

「プラン口にこでる。」

・・・・・・・・・・

私はあんまり真剣に答えてはいなかつたが、彼女は私が答えると嬉しそうにプラン口をこいだり。ときにはそういう質問するよつになつていた。

時々高校生がサッカーをしに来たり、どつかのおじさんやベンチに寝に来たりしたが、あまりこざいざい起きなかつた。

(ああ、一回だけ女子高生がここに来て騒いで、ちょっと揉め事勃発みたいなことが起きたりしたが・・・その時は近くに通りかかった警察官の人があんとか対処してくれたからよかつた。)

「あの・・・どうかしましたか?」

「え?あ、いや・・・ちょっとボーッとして」

「あの、お名前なんて言つんですか?」

「・・・あなたは?」

私はこの時初めて彼女に質問をした。彼女は少し困惑つて、でもうれしそうに言つた。
「私は、ふじいやえつていいます。」

「私はね、とわ

「とわつじじうこう字ですか?」

「京都の都に和む

「きれいな漢字ですね。私はこいつ書きます。」

やえはどじからか木の枝を探ってきて、地面に書いた。

藤井 弥依

書き終わつたらすぐ「ブランコに乗つた。

「都和さんは何歳なんですか?」

「15」

「ええ……」

私は急に弥依が大声をあげたので少し驚いた。

「……」

「あ、『めんなさい』なんか見えなくて。もひとつ歳下かと……」

「……何で?」

「背が低かったから。」

(歳下に普通敬語使うか?)

「あ、気に障つたらな……『めんなさい』。」

「別に気にしてないから。」

「あ、でも話方大人っぽいから……。なんとなく納得できます。」

「……」

弥依は私を都和さんと呼んだ。

私は（あまり呼ぶことはなかつたけど）弥依とは呼ばず「あなた」と呼んでいた。

弥依は素直だつた。

色んなことを聞き、そのたんびにうなずいたり納得したりする顔が面白かつた。

しかし氣を使ってか、あまり私との公園とのことには触れなかつた。

始めより、弥依は大分私と話せるようになつていた。

^1-1 (後書き)

・・・・難しい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9732c/>

とある一つの話

2010年10月8日23時24分発行